



北海道のへき地小規模中学校に勤務する初任段階の 保健体育教諭の実態調査

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高瀬, 淳也, 梅村, 拓未, 今, 竜一, 中島, 寿宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000105

北海道のへき地小規模中学校に勤務する初任段階の保健体育教諭の実態調査

高瀬 淳也・梅村 拓未*・今 竜一**・中島 寿宏***

北海道教育大学旭川校保健体育教室

*北翔大学短期大学部

**北翔大学

***北海道教育大学札幌校保健体育教室

A Survey of Newly Appointed Health and Physical Education Teachers in Remote Small-Scale Junior High Schools in Hokkaido

TAKASE Junya, UMEMURA Takumi*, KON Ryuichi** and NAKAJIMA Toshihiro***

Hokkaido University of Education Asahikawa

*Hokusho University

**Hokusho University Junior College

***Hokkaido University of Education Sapporo

概 要

本研究は、北海道のへき地小規模中学校に勤務する初任段階の保健体育教諭を対象に、日ごらの体育授業を行う上での「楽しさ・やりがい・充実感」や「難しさ・大変さ」に関する質問を行い、その回答を分析した。その結果、生徒一人一人の学習の様子を把握しやすく、その生徒に合わせて指導や支援がしやすいこと、生徒との良好な関係を築きやすいことが、やりがいや楽しさにつながっていると考えられた。一方で、少人数のために複数学年での体育授業を行うことが多く、1時間の授業で複数学年の学習目標や評価などを行うことが経験の浅い初任段階の教諭には大きな負担になっていることが明らかとなった。また、生徒間の技能差が大きく、生徒同士での学び合いが停滞する傾向があり、このことが体育授業の難しさや困難さにつながっていることも示唆された。さらに勤務する学校に相談できる同僚がいなかったり、へき地小規模中学校を対象にした研修の機会が少なかったりという状況があり、へき地小規模校の初任段階の保健体育教諭に、どのように体育授業の情報や研修機会を提供していくかという課題が浮き彫りになった。

1. はじめに

令和4年度の北海道の公立中学校は、全部で560校あり、そのうちの209校はへき地学校の指定を受けている（北海道教育委員会，2022）。このようなへき地校の指定を受け、少人数学級を有する中学校（以降、へき地小規模中学校）では、生徒数の少なさから、生徒の人間関係の固定化や集団学習の実施に制約が生じるなど多くのデメリットが報告されてきている（文部科学省，2015）。特に体育授業では、チームを編成してゲーム・試合を行ったり互いに技の出来栄を観察したりなど、学級の仲間と協力的に学習を進めていけるよう、一定規模の集団が必要である（中島ら，2014）。このため、少人数でどのように体育授業を構成していくかが少人数学級を有する小・中学校で大きな課題となっている。

このことに加えて、へき地小規模中学校では、教職経験の浅い初任段階の教員が配属されることがあり、初任校がへき地小規模中学校となる教員も多い。この背景として、「へき地小規模校から転勤した教職員の補充として、新卒者や比較的若い教師が赴任を求められることが多く、教職員の平均年齢が極めて若い学校が少なくない」（玉井，2004，p.51）などが考えられる。つまり、へき地小規模中学校では、指導経験が少ない初任教員が体育授業を担当しており、少人数の生徒を対象にした授業づくりに対する難しさや困難さを感じていることが予想される。また、川前（2009，p.116）の北海道市町村立小・中学校長に対して行った調査では、「小規模校の教育活動の活性化にとって、若手教員の小規模校に関わる意欲や姿勢が及ぼす影響は大きいと思いますか」という設問に対して、「とても大きい」「大きい」という回答が約80%となっており、へき地小規模校では若手教員の教育に取り組む姿勢が、学校運営にも影響していることがうかがえる。このようなことから、へき地小規模校では、若手教員の育成が重要と言える。特に少人数のために、活動に制限の生じやすい体育授業を指導する教員が感じる難しさや困難さを

把握し、そのサポートを行っていくことが大きな課題と考えられる。

そこで本研究では、北海道内のへき地小規模中学校に勤務する初任段階の保健体育教諭が感じている体育授業でのやりがい・充実感や、課題・難しさを明らかにし、初任教員へのサポートの内容や方法を検討するための基礎的資料を得ることを目的とした。

2. 方法

2.1 対象について

本研究は、北海道内のへき地小規模中学校に勤務する教員採用後1～2年目の保健体育教諭20名に調査を依頼し、回答の得られた17名（男性10名、女性7名、平均年齢27.9歳）を対象にした。

アンケート調査は、Google Formsを用いて行った。調査項目として、フェイスシート（年齢、性別、経験年数、勤務校の生徒数、勤務校の職員数）、体育授業を行う中で「楽しさ・やりがい・充実を感じる（以下、楽しさ・やりがい・充実感）」「難しさ・大変さを感じる（以下、難しさ・大変さ）」の質問について自由記述で回答してもらい、その結果の分析を行った。調査に当たっては、筆者らが対象教員の勤務する中学校の校長及び対象教員に、調査内容、目的、プライバシーの保護、データ使用の範囲について口頭で説明した。この説明を受けて、校長及び本人から承諾を得た後、Google FormsのURLをメールにて送付し、回答を求めた。

2.2 分析方法

対象者から得られた「楽しさ・やりがい・充実感」「難しさ・大変さ」の質問についての自由記述を、助詞の修正や同義語の統一などのクレンジング作業を行った。その後、共起ネットワーク図を活用して分析を行った細川ら（2021）、越中ら（2015）の分析を参考に、KH Coder（Ver.3.0）を用いて計量テキスト分析を行った。分析手順として、「保健体育教員」「少人数」が認識されるよう、あらかじめ強制抽出させる語として設定した。

また、「授業」という言葉が、体育の授業を限定した場合と他教科を含めた場合が見られたことから、前後の文意から体育に限定していると判断されたものは、「体育授業」と置き換え、強制抽出させる語として設定した。

その後、テキストの特徴を捉えるために、頻出語のリスト、および、頻出語に抽出された語と語とのつながりを把握するため共起ネットワークを作成し、初任段階の教員の記述を分析した。分析対象となる抽出語の最小出現回数を3、Jaccard係数を0.3とした。共起ネットワークによって分類されたカテゴリーごとに、筆者らでカテゴリーに含まれる記述をもとに命名をした。

なお、本文では頻出語及び共起ネットワークで示す単語は〈 〉、カテゴリー名は【 】で表すこととした。

3. 結果

3.1 楽しさ・やりがい・充実感について

頻出語上位10語は、表1に示した。最も頻出していた語は〈生徒〉であり、〈授業〉〈感じる〉という言葉が続いていた。

表1 楽しさ・やりがい・充実感の頻出語

抽出語	出現回数
生徒	23
体育授業	11
感じる	10
個別	7
運動	5
楽しい	5
見る	5
少人数	5
練習	5

共起ネットワーク図は、図1に示した。全体として2～5語で構成される5つのカテゴリーに分けられた。各カテゴリーについては以下の通りであった。

①【個に応じた指導や評価】

このカテゴリーは、2つのカテゴリーの記述内容に関連性が強く見られたことから、合わせることにした。この結果、〈練習〉〈取り組む〉〈時間〉

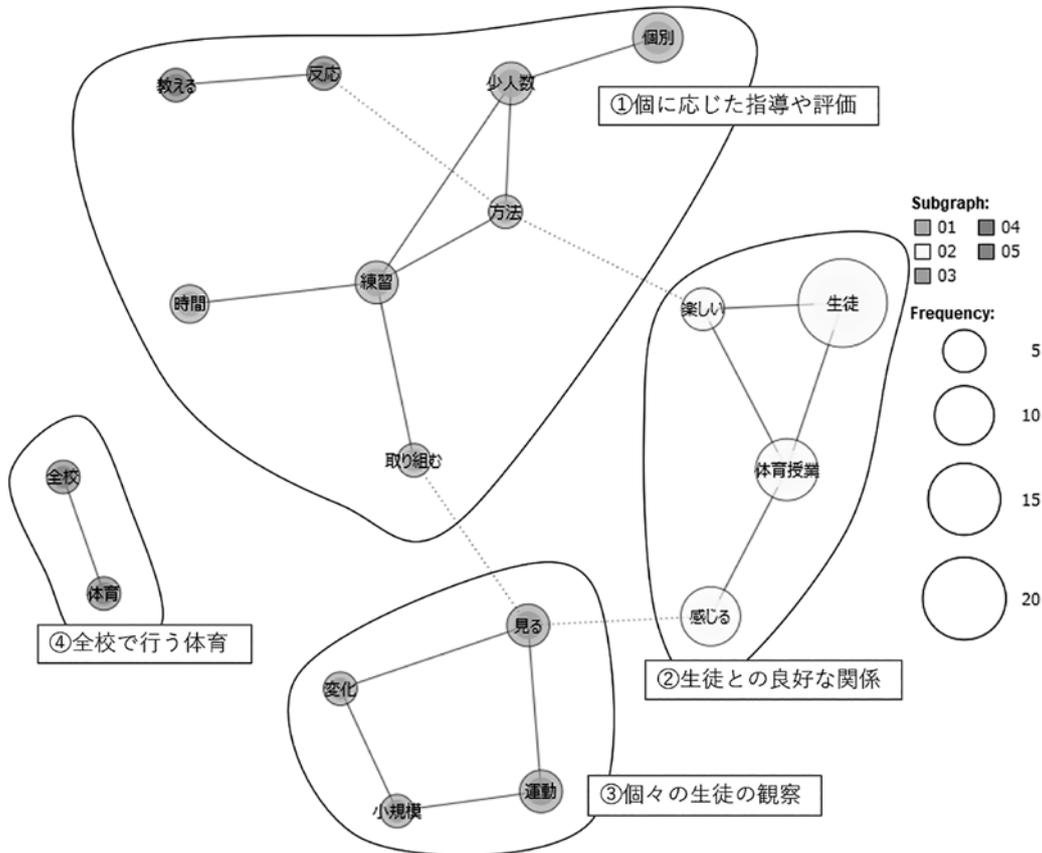


図1 「楽しさ・やりがい・充実感」の記述の共起ネットワーク図

〈個別〉〈少人数〉〈方法〉〈反応〉〈教える〉の8語で構成されたカテゴリとなった。これらの語を含む記述には、「個別の練習方法や練習時間の確保が可能である」「1人がボールに触れる時間も長く取れる。バスケットボールの授業などにおいても、好きなだけランニングシュートの練習などに取り組むことができる」など、用具や施設を使用する順番を待つことなく使用できることで、効果的に技能練習をすることができる内容が述べられていた。また、「少人数である分、個別に関わったり、指導に細かく目を通せるので、できるようになった生徒や、困っている生徒にすぐ気付いていると思う」「『こうすれば良いよ!』と教えると素直に『ああ! 本当ですね!』と反応してくれる」という記述が見られた。授業中、個別に指導する機会が多く、生徒の反応を見ながら練習の方法などを伝えることもできる内容も見られた。

②【生徒との良好な関係】

このカテゴリは、〈楽しい〉〈体育授業〉〈生徒〉〈感じる〉の4つから構成された。文面を見ると、「生徒との距離が近いこと、生徒それぞれを深く知る余裕がある」「生徒たちが学びたいという気持ちで授業に来てくれることに楽しさを覚えています」というように、生徒と良好な関係を築くことができている内容が見られた。また、「生徒と個別にコミュニケーションをとりながら授業できるところがとても楽しい」というように、教師自身が指導することに楽しさを感じることができている記述もあった。

③【個々の生徒の観察】

このカテゴリは〈運動〉〈見る〉〈変化〉〈小規模〉の4語で構成された。文面では「小規模校であるために、生徒それぞれの変化を見取ることができる」「生徒の人数が少ないと、個別に見ることができるため、生徒のちょっとした変化や成長に気づきやすい」というように、授業中、一人一人の生徒の様子を観察することができ、変化や成長を実感しているという内容が見られた。

④【全校で行う体育】

このカテゴリは、〈全校〉〈体育〉という2語

で構成された。「全校生徒の顔と名前が一致しており、個別に深く関わることができ、前年度はできなかったことができるようになったなど、共に喜べる」「全校体育をするなどして、他学年と交流ができる」など、異学年で授業を行う良さについて書かれていた。

3.2 難しさ・大変さについて

頻出語上位10語は、表2に示した。最も頻出していた語は〈生徒〉であり、〈授業〉〈感じる〉という言葉が続いていた。

共起ネットワーク図は、図2に示した。全体として2～8語で構成される5つのカテゴリに分けられた。

①【体育授業の難しさ】

このカテゴリは、〈体育授業〉〈感じる〉〈難しい〉〈授業〉〈少人数〉〈全校〉〈行う〉〈学年〉という8語から構成された。

このカテゴリの記述では、複数学年または全校生徒が一緒に行う体育授業について、準備や指導の大変さや難しさについて述べられていた。例えば、「生徒の人数が少なく、全校で体育授業を行っているため、運動の技能や体格に大きな差がある」「全学年分の体育授業の準備や体育授業そのものが大変」という記述が見られた。また、「運動の特性上、ある程度の参加人数が欲しいが、限りなく少ない人数で実施しなければいけないことが難しい」というように、生徒数の少なさから生じる課題の記述も見られた。

②【相談相手が不在】

このカテゴリでは、〈相談〉〈相手〉〈他〉〈大変〉〈クラス〉〈人数〉の7語で構成された。記述を見ると、「スポーツを行うための人数が足りないため、試合がやりづらい」のように少人数で行う体育授業の難しさについての記述があった。また、「保健体育教員が他にいないために初任者な

表2 難しさ・大変さの頻出語

抽出語	出現回数
生徒	15
体育授業	15
感じる	14
少人数	9
難しい	9
人数	7
学年	6
少ない	6
運動	5
行う	5
授業	5
多い	5
大変	5

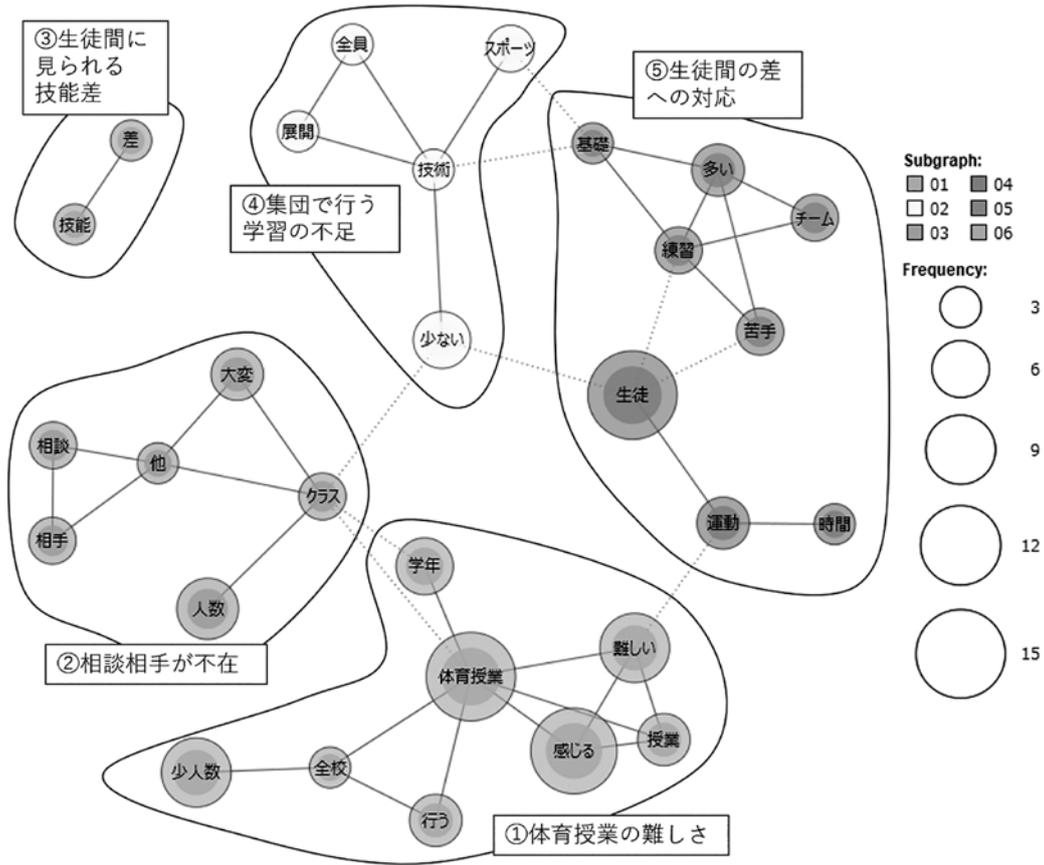


図2 「難しさ・大変さ」の記述の共起ネットワーク図

のに相談したり、勉強させてくれる相手がいない」
 「体育授業の進め方について相談したいことがある」など、職場内で相談する相手が不在で、保健体育教員として学ぶ機会が少ないという内容が多く見られた。特に、「初任者でいきなり体育祭などの行事を任されて進めるのが大変だった」など、体育的行事を一手に引き受けている教員がいることも明らかとなった。

③ 【生徒間に見られる技能差】

このカテゴリーは〈技能〉〈差〉の2語で構成された。記述内容を見ると、「生徒の人数が少なく、全校で体育授業を行っているため、運動の技能や体格に大きな差があること」「技能の差が激しく、二極化の対応が難しい」というような記述が見られた。少人数でも技能の二極化が見られており、その中でどのように体育授業を展開していくかに困難さを感じていると考えられる。

④ 【集団で行う学習の不足】

このカテゴリーでは、〈技術〉〈全員〉〈展開〉〈スポーツ〉〈少ない〉の5語で構成された。記述を見ると、「生徒が少人数のため、チームスポーツの体験が圧倒的に少なく、基礎技術が定着していない学年が続くと、スポーツが成り立たないことが多い」「生徒数も少ないため技や技術によっては全員ができない技やコツがいまいちわからないことがあるので中々そういう体育授業を展開できないことが大変だと感じます」というように、少人数のために球技のゲームなど集団で行う学習に制限が生じており、そのために学習が積み重なっていかないという内容の記述が見られた。

⑤ 【生徒間の差への対応】

このカテゴリーは、記述内容に関連性が強く見られたことから、〈生徒〉〈運動〉〈時間〉と〈苦手〉〈練習〉〈チーム〉〈多い〉〈基礎〉の2つのカテゴリーを合わせることにした。記述内容を見ると「球技では少人数での練習が多くなるため、個別で攻撃することはできるが、チーム全員で連携し

て攻撃することなどが苦手である」「ボール保持者以外の動き方や現場での判断力や思考力が低い生徒が多い」という内容が見られた。このことから、仲間との連携が必要とされる場面でも、適切な状況判断ができていないことを問題視している様子がうかがえた。また、「苦手な生徒が顕著にわかってしまう」「運動が苦手、やる気のないといった生徒の様子をみてどうして良いか」というように、少ない人数の中で苦手意識を持つ生徒をどうサポートするかについても書かれていた。さらに、「運動の苦手な生徒たちへの体育授業に難しさを感じています」「運動が苦手、やる気のないといった生徒の様子をみてどうして良いか判断が難しい事がある」というように、個人差への対応の難しさについても書かれていた。

4. 考 察

本研究では、へき地小規模中学校に在籍する初任段階の保健体育教員に体育授業での「楽しさ・やりがい・充実感」や「難しさ・大変さ」についての自由記述の回答からその内容を分析した。

頻出語を見ると、〈生徒〉〈体育授業〉〈感じる〉の上位3語は、「楽しさ・やりがい・充実感」や「難しさ・大変さ」に共通して見られていた。その他の語を見ると、「楽しさ・やりがい・充実感」では、〈個別〉〈運動〉〈見る〉があり、生徒一人一人に合わせた指導や支援ができることに関連した語であった。一方で、「難しさ・大変さ」では、〈少数〉〈難しい〉〈人数〉〈学年〉〈少ない〉が見られ、体育授業を行う際に学習集団が小さいということに関連している語が見られた。これらの頻出語の結果から、生徒一人一人に合わせた指導や支援ができることが保健体育教師としての楽しさややりがいにつながっていること、一方で学習集団が小さいことが体育授業の難しさや大変さにつながっていると考えられる。

「楽しさ・やりがい・充実感」の質問に見られたカテゴリーでは、初任段階の保健体育教員が【個々の生徒の観察】を通して学習状況や課題を

把握しやすいこと、個に応じた指導や評価を行いやすいことを良さとしてとらえていることが明らかとなった。また、個々で自由に練習ができる用具や練習スペースの確保など個に応じた練習環境を整えやすいことも良さとしてとらえていることも明らかとなった。全国へき地教育連盟（1998, p.16）が「少人数であるため一人一人に目が届き、学級生活上のつまづきをとらえて個々の児童生徒に即した指導ができるという長所がある」と述べているように、へき地小規模校では、個々の児童・生徒に目が届きやすいことがメリットとされてきた。また、用具や教具、場を独占して使用できることもへき地小規模校ならではの（高瀬，2023）と言える。このようなへき地小規模校の特性は、初任段階の教員にとっても体育授業を行う際の利点になっていると考えられる。

また、【個々の生徒との良好な関係】というカテゴリーから、初任段階の教員は、生徒と良好な関係を築きやすいことを良さとしてとらえていると考えられる。これは、少人数のために、教師が個々の生徒とコミュニケーションがとりやすいというへき地小規模中学校の特徴によるものと考えられる。さらに「学級担任を超えて、全教員が全子どもの様子を多面的にとらえている」（玉井，2013a, p.43）ことが多く、職員室などで生徒に関する情報交流がしやすいことも背景にあると考えられる。これまでも、へき地小規模校は「教師と子どもの関係および子ども同士の関係では、親密な関係があり、教育活動の条件としては非常にいい関係を持っている」（玉井，2013b, p.19）と言われてきた。本研究対象の教員も、授業や学校生活を通して生徒と良好な関係を築きやすい環境下であり、体育授業における楽しさややりがいにつながっていると考えられる。

加えて、適正規模校に比べ、へき地小規模校は複式学級をはじめ、全校児童生徒で給食を食べる、休み時間に全学年で遊ぶというように異学年交流が取り入れられていることが多い。異学年交流は「上学年の児童が下学年の児童に説明したり、動機づけを図ることができ、学年を超えて『学び合

い』の態度も育成できる」(藤岡, 2010, p.160)など、様々な効果が期待できる。【全校で行う体育】は後述する課題はあるものの、異学年交流による学習効果を得ることが可能であり、このことが授業者として充実感などにつながっていると考えられる。

このように初任段階の教員は、「楽しさ・やりがい・充実感」について、個々の生徒に対しての指導や学習状況の把握が容易で、生徒と教師と良好な関係を築きやすいことを良さとしてとらえており、このことが教員としてのやりがいやモチベーションにもつながっていると推測される。

その一方で、「難しさ・大変さ」を感じることの質問では、8語から構成される【体育授業の難しさ】というカテゴリーが生成されていた。このカテゴリーには、〈少人数〉〈全校〉〈行う〉というワードが含まれており、複数学年で行う体育授業についての記述が多く見られた。へき地小規模中学校では、一学年の生徒数が少なく【集団で行う学習の不足】が懸念される。このため、一定の人数を確保するために複数学年が一緒に体育授業を行うことがある。複数学年、または全校で体育授業を行う場合、多くは「同一時間と同一場面で複数学年の児童が同じ単元(題材,教材,主題等)を用いて指導」(北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター, 2021, p.20)する同単元指導が行われる。この指導法は、球技領域のゲームなどを行う際は、人数を確保でき協働的な学習が展開しやすい。その一方で、1時間の授業に各学年の学習内容や評価などを準備する必要があり、単式学級の授業に比べ授業者への負担が大きくなる。特に初任段階の教員は、体育授業の指導経験がまだ浅く、知識や技能が十分に身に付いていないことが考えられ、複数学年を対象にした体育授業を行うことは難しいと言える。このようなことが、へき地小規模中学校の体育授業の難しさを感じさせていると考えられる。

これに合わせて、本研究では、【生徒間に見られる差の対応】【技能差】についても、指導に難しさを生じさせていることが明らかとなった。適

正規模中学校では、技能段階の似た生徒同士でグループを編制して、互いに動きを見合い教え合うことができる。しかし、へき地小規模中学校では、生徒間の技能差が大きくても、常に同じメンバーで教え合わなければならない。さらに、少人数であることは、自分と技能レベルが同程度の仲間が少なく、集団内の技能差が大きくなることが多い。この結果、技能の高い生徒は技能の低い生徒に助言を求めにくく、生徒同士での学び合いが停滞するという問題も考えられる。このような状況から、へき地小規模中学校の体育授業では、授業者が個々の学習の様子を把握し、それをもとに指導することが重要になってくる。しかし「少人数学級の問題として、教師のリードが強くなりすぎることで、児童生徒は教師依存になりがち」(全国へき地研究連盟, 1998, p.24)という懸念もあり、複数学年での体育授業も、初任段階の教員には難しさを感じさせていると言える。

さらに、「同じ教科の先生がいないので、相談ができない」「同教科の教員がいないために初任なのに相談したり、勉強させてくれる相手がない」という記述のように、勤務校に保健体育教員が自分一人しかいないため、授業づくりをはじめ、保健体育関係の学校行事の運営を担う際の【相談する同僚が不在】という課題も見られた。本研究の対象校は、北海道にあるへき地小規模校であり、広域性が強いことを考えると、近隣の中学校に行って研修を受けたり、相談できる先輩教師から指導を受けながら教師として力量を高める機会が少ないことが想像される。

このように、へき地小規模中学校に勤務する初任段階の教員は、複数学年で行う体育授業の展開や個人差に対応した指導の難しさ、また相談相手の不在といった課題に直面していることが明らかとなった。

5. まとめ

本研究は、北海道内のへき地小規模中学校に勤務する教員採用後1～2年目の保健体育教諭を対

象とし、体育授業を行う中で「楽しさ・やりがい・充実を感じること」「難しさ・大変さを感じること」の質問について自由記述で回答してもらい、その結果の分析を行った。その結果、以下のことが明らかとなった。

- 初任段階の保健体育教員は、個々の生徒の観察を通して学習状況や課題を把握しやすいこと、個に応じた指導や評価を行いやすいこと、個々で自由に練習ができる用具や練習スペースの確保など個に応じた練習環境を整えやすいこと、生徒が良好な関係を築きやすいことを良さとして捉えており、へき地小規模校の特性が初任段階の教員にとっても体育授業を行う際の利点になっていることが示唆された。
- 少人数のため、複数学年での体育授業を行うことが多く、1時間の授業で複数学年の学習目標や内容を設定したり評価を行ったりすることは、経験の浅い初任段階の教員には大きな負担になっていることが明らかになった。また、生徒間の技能差が大きく、生徒同士での学び合いが停滞する傾向にあることを課題に感じていることも示唆された。さらに、勤務する学校に、授業など業務を進める際の相談する教員がいないため、同僚から指導を受けたり校内研修などを通して保健体育教員としての力量を高めたりする機会が少ないことも明らかになった。

今後は、本研究結果をもとにへき地小規模校の初任段階の教員にどのような内容の研修を提供していくか、また研修の機会を確保するためオンライン研修を中心に、検討していきたい。また、へき地小規模中学校に勤務する保健体育教員と連携しながら、少人数での体育授業の実践についても今後も発表し続けていきたい。

引用・参考文献

藤岡秀樹 (2010) 複式学級の指導についての研究—教授方法を中心に—. 京都教育大学紀要, 116 : 153-164.
川前あゆみ (2009) 北海道小学校長から見たへき地小規

模校の現状と課題. 釧路論集 : 北海道教育大学釧路校研究紀要, 41 : 105-121.

越中康治・高田淑子・木下英俊・安藤明伸・高橋潔・田幡憲一・岡正明・石澤公明 (2015) テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析 : 共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み. 宮城教育大学情報処理センター研究紀要, 22 : 67-74.

樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— 第2版』. ナカニシヤ出版.

北海道教育委員会 (2022) 令和4年度 (2022年度) 北海道学校一覧 5 中学校の部.

https://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/fs/7/9/9/9/7/4/2/_/5%20%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E3%81%AE%E9%83%A8.xlsx. (参照日 2023年4月3日).

細川佳能・助友裕子・石井香織・岡浩一朗 (2021) 都市部におけるスポーツ推進委員の連絡調整機能の特徴. 日本健康教育学会誌, 29(4) : 337-347.

文部科学省 (2015) 公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引—少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて—.

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2015/07/24/1354768_1.pdf. (参照日 2023年4月3日).

中島寿宏・秋野禎見・高瀬淳也 (2014) へき地小規模小学校におけるICT利用による児童の協働性を引き出す体育授業—クラウドコンピューティングを用いた2小学校間での交流実践. 運動とスポーツの科学, 20(1) : 113-120.

高瀬淳也 (2023) 小規模校における体育の役割. 体育科教育, 71(3) : 12-15.

玉井康之 (2004) へき地小規模校経営の特性と学校管理職の役割. へき地教育研究, 59 : 51-57.

玉井康之 (2013a) 社会性をはぐくむへき地小規模校の学級経営の基本観点と課題. 玉井康之監修, へき地小規模校の理念と実践. 教育新聞社, p.41-51.

玉井康之 (2013b) へき地小規模校における少人数・複式授業運営の基本的観点. へき地教育, 67 : 15-20.

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター (2021) へき地・複式・小規模校教育の手引—学習指導の新たな展開—.

全国へき地研究連盟 (1998) 学習指導方法の工夫・改善.

(高瀬 淳也 旭川校教授)

(梅村 拓未 北翔大学短期大学部講師)

(今 竜一 北翔大学講師)

(中島 寿宏 札幌校教授)